

中小企業の成長のためのイノベーション研究会（第2回）議事要旨

日時：2025年3月12日（水）16:00～18:00

場所：経済産業省別館2階244会議室及びMicrosoft teams オンライン会議

出席委員：大坪委員、福田委員、森委員、渡辺委員

- イノベーション・プロデューサー実証事業は今年から2年目に入り一定の手応えを感じられている中で、マーケットインのイノベーション支援というモデルを今後どういう風にしたら自立的に広げていけるかが課題と感じる。今後の方向性として単に支援の活動を継続するというだけでなく、生まれた事業や技術がどのようなインパクトを持ったのかを測るための定量的な成果指標を設定すると良いのでは。例えば、イノベーション・プロデューサーの方が支援した企業の売上成長率や、資金調達の成功事例や、他企業との提携事例等を整理して、どのような支援が有効であったかを定量的に明確にすべきだと考える。
- 今後は、モデルケースを示すことが本プロジェクトの大事な意義だと理解している。国の支援は、数や速度にも限度があると考えするため、例えば、大企業が行っているようなオープンイノベーションのプログラムをどう活用していくか示すことも1つの案かと考える。メディアへの露出も含めて、中小企業の経営者へ打ち出していく方法も検討の余地があるのではと考える。
- 生産性向上や省力化のために何をどう進めるべきかをしっかり見極めて、それを推進できる人材が圧倒的に不足しており、ここに問題があると考え。問題は、自社の業務に落とし込んで、全体の仕組みとして機能させる音頭取りをする人材がいらないことではないかと考えるため、こういった変革を主導できる経営の中核人材を中小企業の中でどう育てて現場に配置していくかというのが鍵になると考える。
- AIST solutions の取組は非常に注目していた。中小企業はどのようなアプローチをすれば良いのかが分からない。どんな研究が世の中にある中で中小企業が役に立つものはどこなのか探していくまでのステップが明確になると良い。技術キーワードからそれに関わる研究を探して、研究と特許を合わせてこんなものができるというものがあると非常に良い。研究開発のテーマを一覧化したものがあると良い。使っていない特許と中小企業の技術を組み合わせて商品化できるものが無いかを探し、そこに対する開発費が支援されるとなると非常に良いのでは。
- 生成AIを使って、産総研で持っているデータを、情報発信したり、研究の理解を進行したりするような動きができると良いと思う。
- フラウンホーファーは軍も民も分け隔てなく研究所を展開しているので、軍事の研究もしている。研究の中で一番光っていたのはセンサーであったが、その際に、フラウンホーファーは企業の研究開発をプロジェクトで支えるということを実践している。ドイツの会社は大きな研究所を持たなくても、フラウンホ

ーファーをバックボーンにして研究開発をやっている、小さな会社でもフラウンホーファーを使えばかなり良い研究開発を受けられるという印象を受けた。

- 中小企業で大きな研究部門を持ってないところでも、フラウンホーファーがその代わりとなるような機能を持つというのは、それぞれ定款の中にもあるうえ、中小企業のパートナーとして活動したいため、プロジェクトベースではあるが、ずっと中小企業のパートナーとして長年フラウンホーファーで研究開発を積み重ねていくことができると考えている。

以上